

花

館長 小 野 健 一

世阿彌元清といえば父親の観阿彌清次と一所に能楽を大成した人であるのは今さら言うまでもない。能役者であると同時に能の作者でもあり芸術理論家でもあるという、古代ギリシアのソポクレスに匹敵するわが国最高の文化人の一人である。勿論著書も沢山ある。尤も、彼の著書は最近まで能の宗家の秘伝書で、私どもの目に触れる機会はまず無かったのであるが、現在では、各流派の伝書が専門家の手で比較考証されて定本が作られ、活字本になって市販されているから、どこの本屋さんでも簡単に手に入る。

その世阿彌の著書の中に「花」という言葉が出てくる。世阿彌はこの「花」という言葉を独特の意味に使って、専門家の間では「花」をめぐる難しい議論があるのだが、この言葉のおよその意味ならば、世阿彌自身が解説している箇所がある。

それは確か『中楽談義』の中だったと思うが、短い言葉で、右、左と出る筈のところを「右、右と出づるが花なり」と言うようなことを言っている。要するに、破調の美とでも言ったものを指す言葉らしいのである。

勿論、破調がいつも美に結びつくとは限らない。右、左と出る筈のところを初心者が右、右と出たら、それは間違いであって「花」でも何でもない。決まり通りにしなければさまにならない人たちは決まり通りにするしかない。決まりを意識しないで自在に舞える境地に達した名人上手が右、右と出るからこそ初めて鮮やかな美が生まれる。彼等の芸の醸す独特の雰囲気こそ世阿彌は「花」という言葉であらわしているのであろう。

そんな解釈をしてよいなら、「花」は能楽に限らず、どこの世界にもありそうな気がする。勿論、自然科学の研究にも「花」はある。例えば、フェルミが原子炉なるものを初めて考案して実際に作った世界最初の原子炉（いわゆる一号炉）というのがシカゴ大学に保存されている。この原子炉は初めの計画では球形になる筈であったが、中性子密度を測定しながら慎重に組立を進める内、ある大きさに達したところで既に連鎖反応が始まっていることを知ったフェルミは、そこで組立を止めて完成ということにして仕舞ったので、現実の一号炉は、設計図と違って、球の上部三分の一ばかりを水平に切り取ったような妙な形をしている。それを醜と見るか、あるいは実存的な美を認めるか、その辺が難かしいところであるが、いずれにしても、フェルミという一つのパーソナリティーを強く感じさせる原子炉になっているのである。創造的知性は時に論理を無視するが、論理を無視するに足る強烈な個性に達したとき、はじめて創造は可能なのかも知れない。

新入生諸君に何かお祝いを差上げたいのだが、まさかチョコレートというわけにも行かないから、私の大好きな世阿彌の「花」という言葉をお贈りして、諸君の大学生生活の饒にさせて頂く。

（物 理 学）

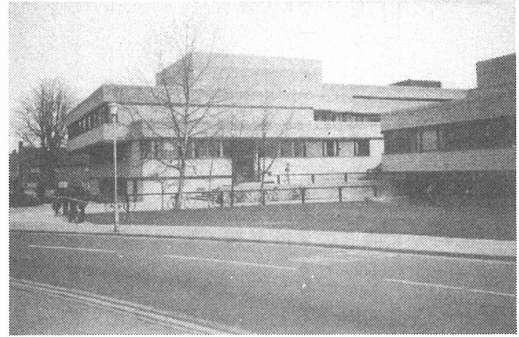
オックスフォード大学の図書館について

瀬 谷 幸 男

ロンドンのパディントン駅から急行で一時間余もすると、車窓の右手前方にオックスフォードの教会やコレッジの林立する尖塔が視界に入ってくる。1979年4月、一年間の留学のためこの地を4年ぶりに再訪する機会に恵まれた。前回はヨーロッパ旅行の途次、わずか一週間ほどの短い逗留であったが、中世以来の長い伝統に培われたこの学園都市の品位ある佇まいに深く感動を覚え、いつの日か、と心に決めた宿願が思いのほか早く実現できた喜びはひとしおであった。折しも、この北国の街もようやく長く陰うつな冬の支配から解放され、雲間から時折和らかな陽ざしがさしそめる、まさに一陽来復の季節を迎えるところであった。また、英国の春の到来を告げる風物詩に April showers (4月のむらさめ) と呼ばれる気象現象があるが、これは日本の春雨のようにしとしととそば降るものではなく、さながら如露から勢いよく吹きでる水のようにひとしきり強く降っては止み、止んではまた降るというむらさめである。この雨に大地が洗われ、道端や公園や庭先に色とりどりのクロッカス、ラッパ水仙、ひな菊などがいつとくに咲きほころび、ものみな生気が蘇る春の風情は実に美しいものである。長い冬の厳しい寒さを耐え忍ぶイギリス人がいかにこの一瞬を待ち焦れるか、またそれを迎えた時の喜びがいかに大きいか分るような気がする。この4月の雨でまっ先に想い出すのはチョーサーがその傑作『カンタベリー物語』の総序歌の冒頭で詠んだ次の絶唱であろう：

“ 4月のやわらかいむらさめが
3月のひでりを根もとまでしみ通し、
その湿りであらゆるものをうるおし、
その精気で花がほころびそめるとき。
..... ”

この章句はそのような4月の風ぬるむ春の日に、人々がそぞろカンタベリー大寺院に巡礼の旅へ



英文科付属図書館

と誘われる心情を描写したところだが、今初めて実感として味い知る思いだった。

4月も下旬になってようやく学期も始まり、街には学生達の姿が溢れて活気が漲ってきた。因みに、英国の大学は三学期制で新学期は10月中旬のミクルマス・タームから始まり、次に1月下旬のヒラリーターム、最後に4月下旬のトリニティータームをもって終る。各学期は8週間で計24週が一年間のフル・タームとなる。即ち半年間は休暇というわけである。いよいよノースバレードの下宿から大学公園を横切って英文学科の講義室とボードリアン図書館に通う日々が始まった。講義はかねて手紙で連絡していた気鋭の中世英文学者、ハドソン女史のチャーサー関係のものを中心に受講し、折にふれ指導を受けながら一方ボードリアン図書館では専ら中世ロマンス文学や世俗的抒情詩に関する文献調査や資料収集を行った。この図書館は17世紀にトマス・ボドレー卿によって再興された世界屈指の大学図書館としてつとに有名なものである。

オックスフォード大学の図書館は大別して3つの柱から成り立っている。即ち、中央図書館としてのボードリアン、34の各コレッジやホールに付属する学寮図書館、学部、学科や研究所に付属する図書館である。さらに直接大学にシテイライブラリー ポリテクニク所属するものではないが市立図書館や技術工芸

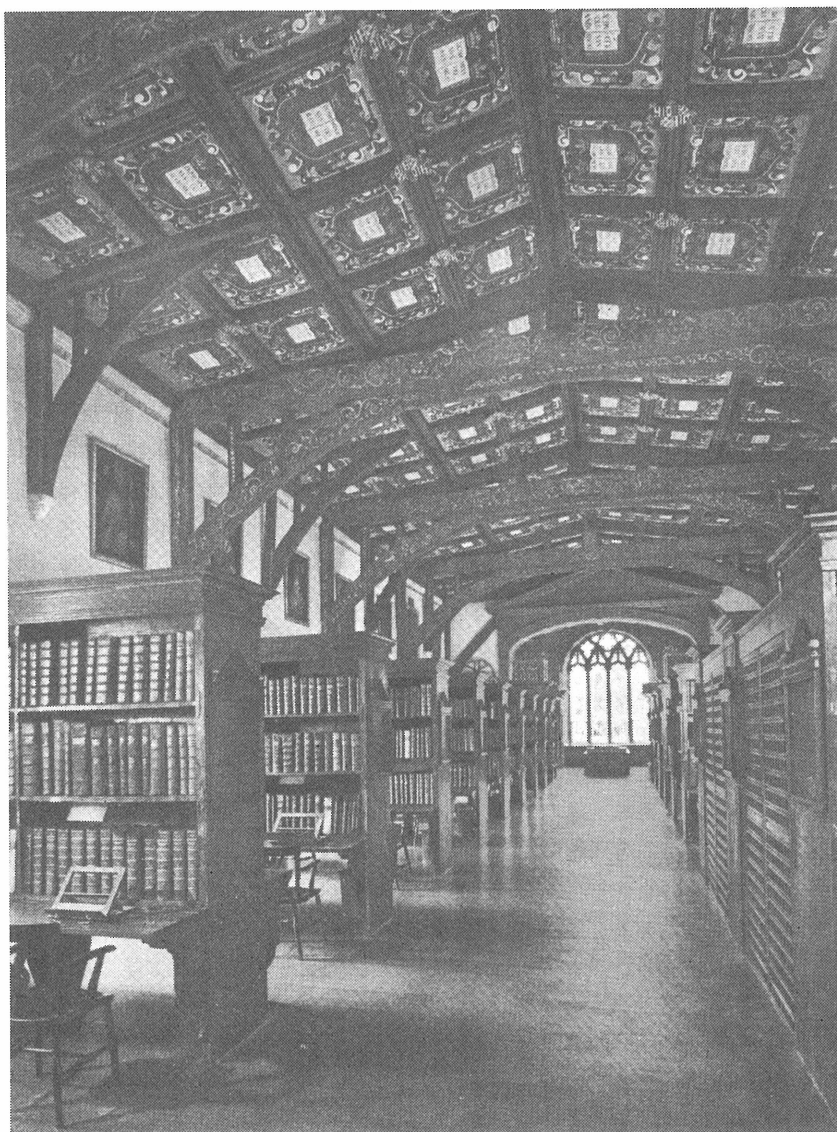
図書館等もあり、洵に恵まれた図書利用の便宜が与えられている。ここではボードリアン図書館と英文科付属図書館について少々述べてみよう。

大学中央図書館としてのボードリアンの歴史は1320年、ウスター出身のトマス・コバム司教の創設にまで遡るとされる。以後多くの愛書家の篤志によって貴重なコレクションが贈与または寄託され充実の一途を辿って行った。15世紀には、そのような篤志家の中にヘンリーⅣやグロスター公ハンプリー等の名も数えられる。特にこのハンプリー公は新しい建物と共に当時英国では大変珍しいギリシア、ラテンの古典語のテキストや古写本の一大収集を寄贈し、既に名実ともに誇るべき大学図書館になっていた。（現在でもこのハンプリー公の功績を記念して彼の名を冠した館内随一に豪華で威厳ある閲覧室があり、ここには、5万冊余の古写本や1641年以前に刊行された古書や稀覯本のたぐいが収蔵されている。特にMS Fairfax 16は『カンタベリー物語』以外の一連のチョーサーの作品が網羅されており、写本の中でも最高のものとされる。実際に手にとってみた時はさすがに興奮したものだ。）だが、不幸にして1550年、エドワードⅣの治世に、カトリックを敵視する宗教上の理由から同館所蔵の貴重な採色写本等はことごとく破棄され、先人達の意図や努力は見るかげもないほど踏みにじられてしまった。まさに受難の時代であった。それ以後50年に亘って中央図書館不在の時代が続いたが、1598年になってようやくモードレンコレッジ卒の有能な外交官であったボドレー卿がこの惨情を慨嘆し熱烈な母校愛から私財をなげうって図書館再建に乗り出し、自分の蔵書はもとより、エセックス伯や当時の多くの貴族に説いて蔵書の寄贈を促し、遂に1602年、新たに開館の運びとなった。現在の館名はこのボドレー卿の名に因んでつけられたものである。蔵書数がふえるにつれてボドレー以来の旧図書館に、1749年ラドクリフカメラが、さらに1946年新図書館が時のジョージⅥの名において建てられた。以

上の3つの図書館を主体にしてその他4つの付属分館を加えたものの総称がいわゆるボードリアン図書館である。現在この中央図書館は総数400万冊をこえる膨大な蔵書を有し、ブリティッシュライブラリーロンドンの大英図書館（現在は博物館から独立した存在である）に次ぐ英国第2の規模を誇るものである。さらに特筆大書すべきことは大英図書館やケンブリッジ大学図書館などと共に1662年、英国の書籍出版組合と法律上の協定を結び、その年に出版された全刊行物は必ずこの図書館に一部ずつ寄贈される特権を得たことであろう。

旧図書館内には3つの読書室があり2階の読書室（LRR）には書誌、総合図書目録（これはカード分類によるものではなく今なお分厚い紙の綴じ本にインクでアルファベット順に著者名が記載されている）、伝記、初期キリスト教関係書、中世ラテン研究及び古典ギリシア、ラテンの研究図書が置かれている。3階の読書室にはリサーチ用の全時代に亘る英語英文学関係図書や中世及び現代の歴史研究図書が収蔵されている。もう一つのハンプリー公閲覧室は前述の通りである。次にラドクリフカメラ（カメラとはラテン語で丸天井の部屋を意味する）は主に学部を学生を対象とした歴史、教育、美術、英語英文学や神学関係の読書室にあてられている。最後に新図書館は地理、地図、政治、現代哲学、経済、スラブ及び東欧研究、音楽、インド研究の書籍が収蔵されている。これらの図書館利用者は学生を含めてしかるべき人の推せん状を持参して入館手続きをし、reader's ticketの交付を受けなければならない。その際次のような宣誓文を大声で読まされる：「私は当図書館内からいかなる本や文書も、また当図書館のいかなる所有物や収攬物も持ち出したり、印をつけたり、傷つけたり、破損したりは一切しないことを誓います。さらに、当図書館内に火気あるものを持ち込んだり、喫煙したりせず、定められたすべての規則に従うことをここに誓います。」勿論、ごく当り前のことなのだが、余りに大仰にも思え、緊張して思わず英語の発音を間違えてしまった苦い思い出がある。学期中

の開館時間は月曜～金曜
 9: a.m.～10: p.m.で土曜
 は9: a.m.～1: p.m.まで。
 休暇中は月曜～金曜が9: a.
 m.～7: p.m., 土曜は9: a.
 m. ～1: p.m. で日曜日は閉
 館となる。いずれの読書室
 でも開架式書棚の本は自由
 に取り出して利用できるが、
 その本の後に自分の
 机の座席番号と日付を
 記入したスリッパをはさ
 み他人の便宜を図るべく
 義務づけられている。読
 みかけの本は書棚に戻す
 ことなく自分の座席にそ
 のまま置けば、翌日来た
 時も同じ席で利用できる
 仕組みになっている。次
 に書庫の本は注文伝票を
 係員に渡し、利用する読
 書室を予め指摘すれば、
 その部屋の予約カウンタ
 ーでリーダーズチケット
 を提示することによって
 受けとることができる。
 通常この種の本は2週間
 予約カウンターでキープ
 しておいてくれる。読書
 室の机は4～5人掛けの



Duke Humfrey's Library, 西向きに見たところ

低い仕切りの付いたものだが、書見台も十分に
 利用できるスペースもゆったりした仲々快適
 なものである。海外からの留学生にはじっくり
 腰を据えて読める本の数も自ずから限られるの
 でどうしてもコピーサービスが重要な仕事の
 一つになるが、版權問題（英国では著者の死後、
 50年）とのからみで 1) 私的研究を目的とす
 るものにかぎる、 2) 同一ページの複数コピー
 は禁止する、 3) 総コピー数は全体の10%以
 下とする、という条件で1ページあたり6ペ
 ンス（日本円で約30円）のサービスが得られる。

その他、写本やマイクロフィルム作成用の写真
 撮影、タイプ室、盲人のリーダー用の施設、マ
 イクロフィルムの読みとり機、写本を解読する
 ための紫外線ランプ等が備えられており、実
 にサービスが行き届いている。また、セルフサ
 ーヴィス乍ら軽い飲み食いのできる会員制のコ
 モンルーム（談話室）も併設されて至れり尽せ
 りの環境をつくりだしている。

壮重な風格を具えたボードリアンとは全く対照的
 で、この大学には珍しいモダンな鉄筋コンクリート
 造りの英文学科の図書館は1959年に完成されたもの

であるが、その学科図書館としての基礎は1914年まで遡る。現在の講義室やゼミナール室と隣接するためもあるが大変便利なため、毎日の利用率も非常に高い。ボードリアンでは蔵書の館外貸出しは一切厳禁であるが（この規則はボドレー卿の昔からのもので、当時のチャールズIIやクロンウィルさえ例外ではなかったというエピソードがある）、この図書館では本の種類によって1週間から4週間まで、最高6冊までの館外貸しを認めて利用者の便宜をはかっている。英文学科専門図書館として5万冊の蔵書数と100種の学術雑誌のバックナンバーが揃っている。また平日の開館時間は9:30 a.m.~7: p.m. まで、土曜日は12:30 p.m.に閉館する。セルフサービスではあるがここでは比較的自由にコピーをさせてくれた。ただコピー機の方は建物とはうらはらに大時代な代物で大いに閉口した。と云うのは、先ずコピーを依頼するとページ数に合せて専用のトークンとかダイムとかいう硬貨を渡されるが、その硬貨を入れてコピーができるまで実に4~5秒もかかる始末である。いかに骨董品を大事にするイギリス人とは云え、これには大いに腹が立ったので、以後借り出せる本は街の文房具店で日本の小西六のユービックスを利用した。その性能の高さを得意になって店員に吹聴したのは我ながらおかしかった。或る日この図書館で本を捜していると、学生時代に御指導いただいた厨川文夫先生がバリの国立図書館で発見された古写本を世界で初めて校訂出版した『完全に関する八章』という英文の本を偶然見つけた。この本は14世紀の英国の修道参事会士、ウォルター・ヒルトンの宗教散文であるが、この日本の碩学の手で刊行されたものを本場の学究達が手垢のつくほど参照しているのに出くわした時は、云い知れない感動にうたれ改めて敬服の念を覚えたものである。

総じてオックスフォードの学生はよく読書をして図書館の利用度も大変高いようである。それは1つには昨今本自体が大変高価であるせいもあろうが、唯そればかりではなく、自分が読みたい本又は読まなければならない本がいつで

も確実に図書館で見いださうという恵まれた環境もその理由の1つに考えられると思う。これにまさる贅沢はないが、一朝一夕に達成されることでないのも明らかであろう。あるアメリカの学者(A)がオックスフォードの教授(O)を訪ねた時、そのキャンパスの芝生の美しさに感嘆して次のような会話が合った。A:「どのようにしたらこのような美しい芝生のグリーンを出すことができるのですか?」 O:「実に簡単ですよ、水をやれば良いのです。」 A:「水なら我々も充分与えています。」 O:「いや、ただ我々は600年このかた延々と水を与えてきましたがね。」この言葉を聴いてAは二の句がつけなかったというエピソードがある。これが伝統というものの重みであろうか。世評、英国病、老大国と云われる中で、ここの学生達の悠揚せまらざる物腰もそのへんにあるのかも知れない。ラテン語で“Deus illuminatio mea”（主はわが光りなり）と書かれた大学の紋章(Armsと云う)が図書館の天井や壁にはめこまれている。文字通り英知の光り輝く学府として、その伝統の灯を守ってゆくことだろう。

あれから既に2年、時の経つのは実に速いものである。4月のむらさめ、ハドソン女史のまぎれもないクィーンズイングリッシュの快い響き、いつも親切な心くばりをして再三御自宅にお招き下さったアチソン教授の温顔、延々3時間にも及ぶ楽しい乍ら肩の凝るクィーンズコレッジのハイテーブルの晩さん会、そしてとりわけ、長く陰うつな冬の夜、パブの暖炉の前で友と飲みかわしたビターのまろやかな舌ざわりに想いをはせる今日此頃である。

モーツアルトの一側面

坂 入 清

モーツアルト (Wolfgang Amadeus Mozart 1756-1791) の作品に「音楽の冗談 (E-in musikalischer Spass)」(K. 522) という4楽章からなるディヴェルティメント (嬉遊曲) があります。「村の楽士6重奏曲 (Dorfmusikanten-Sextett)」とか「農夫の交響曲 (Bauernsinfonie)」などと呼ばれるこの奇妙な曲は、横溢した諧謔精神から生まれた冗談音楽で、モーツアルトは当時の下手な演奏家 (1778年ザルツブルクのチェルニン伯によって作られた素人オーケストラと言われています) を揶揄嘲笑しています。しかしそれ以上に何も知らないのに大それた作品を書こうとする素人作曲家を風刺したと言われています。随所に音楽上の誤りが巧妙に用いられており、例えば第2楽章メヌエットに出てくるホルン二重奏の不協和音とか、第3楽章アダージョで第1ヴァイオリンによるカデンツァが高潮して高い音に達した時、1音だけとんでもない音を鳴らすとか、さらに第4楽章の最後が大混乱して「落ち」になる、など作曲理論を知らない私にも気がつく点です。最後の終止和音は、ホルンがヘ長調、第1ヴァイオリンがト長調、第2ヴァイオリンがイ長調、ヴィオラが変ホ長調、低弦が変ロ長調というふうに演奏者がそれぞれ勝手な調性で不協和音を重ねるので、これを聴き終ったら、吹き出してしまいうでしょう。この曲はモーツアルトが拙劣さをまねて作ったのですが、そこはやはり音楽史上の大天才の作品ですから結構面白いものです。是非一度この迷(?) 曲に耳を傾けて下さい。

「音楽の冗談」が作曲されたのは1787年6月ですが、その2ヶ月位後に、あの有名な、広く知られている美しい曲「アイネ・クライネ・ナハトムジーク (Eine kleine Nachtmusik)」(K. 525) が生まれます。作曲の動機や、誰の依頼で書かれたのかは不明ですが、著名なモーツアルト研究家アインシュタイン (Alfred E-



ピアノに向かうモーツアルト

ヨーゼフ・ランゲ筆 (1782/1783冬?)
(ザルツブルグ、モーツアルト博物館)

instein 1880-1952) は「「音楽の冗談」によってへば作曲を諷刺するのは、彼にとっては尽きない楽しみであつたに相違ない。しかし、それはまた一種の自己強制、抑圧、不自然でもある。彼のようにきわめて《デリケートな耳》を持つ人間にとっては、あのような退化した音楽に対する修正が必要だったのである」(『モーツアルト』浅井真男訳) と言い、「音楽の冗談」で音楽の秩序を壊した後、その秩序を回復するために内的衝動から「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」を作曲した、という見方を取っています。

「音楽の冗談」と同じ系列に属する作品として「ガリマティアス・ムジクム (Galimathias musicum) (音楽の駄弁)」(K. 32) があります。これは1776年ハグで作曲された混成曲です。

モーツアルトは音楽を冗談化したばかりでなく、妻や母や友人そして従妹等に宛てた手紙の中でも、冗談、駄洒落、軽口などを書き記しています。彼は陽性で面白い人物だったと言われ、彼の周囲には笑いが絶えなかったのです。

次に一通の手紙を紹介しましょう。これはいわゆる『ペーゼレ書簡』といわれるもので、モーツアルトが従妹 (ペーゼレは「従姉妹」《バ

ーゼ』の縮少形) のマリア・アンナ・テクラ・モーツアルトに宛てた手紙です。先ず書き出しは、日本語でいう「おどろき、桃の木、山椒の木」のような語呂合わせです。(日本語訳ではわかりにくいのですが)

マンハイム 1777年11月5日
ヘズレ
最愛のベーズレ・兎ちゃん、

なつかしいお手紙、たしかに受け取り・ぶんどり・ました。おじさん・どじさん、おばさん・ろばさん、そしてあなた・そなたが、お元気・お天気・だと分かりました・曲がりました。ぼくたちも、ありがたいことに、たいへん健康・頑固・です。ぼくたちは今日、うちのパパ・ハハー・からの書面・ご免・も手に入れました。あなたも、ぼくがマンハイムから出した手紙・女神・を受け取った・刈り取った・ことでしょう。それで結構、結構それで、／ ところで、今度はまともなことを〔書きましよう〕。……以下略(柴田治三郎編訳『モーツアルトの手紙』) この後、モーツアルトお得意のスカトロロジー(糞尿談)が始まり、終りの方に尾籠な話ができます。興味のある方(?)はどうぞ続きをお読み下さい。上記訳は岩波文庫。あるいは吉田秀和編訳『モーツアルトの手紙』(講談社)。

モーツアルトがこういう事をいうのは「なぜか、内心の緊張を匿そうとしているか、あるいは、胸中に湧き出る神的な想念と日常の卑俗な戯れとの対比に、一種のセルフ・アイロニーをもって、興じていたのかも知れない。」(上記岩波文庫)とされています。彼はダンス、賭事、ボーリング、トランプなど遊ぶことは大好きだったそうで、彼の「遊び好き」は、音楽を創作する時の凄まじい集中力(交響曲第36番「リンツ」(K. 425)は3日間ですきと云われます)の緊張緩和の役目を果たしたのでしょうか。

モーツアルトは歌詞つきカノン(主題と呼ばれる一声部が旋律を始め、これが応答と呼ばれる他声部によって、ある一定の時間的間隔をおいて正確に模倣される形式)を27曲残していますが、世俗的な、楽しみのためのカノンがほとんどで、宗教的なものは3曲に過ぎません。

家族、友人の集まりで、冗談をカノンや重唱にして歌っていたのです。歌詞は下品猥雑なものが多いのですが、こういう一面を無視しては笑い戯れるモーツアルトの人間性は理解できなくなるでしょう。

例えば、

Difficile lectu mihi Mars
Et jonicu difficile.

「戦記を読むなんてとても俺には」(K. 559) というこのラテン語の歌詞には、実はドイツ語が隠されているのです。最初の二語は「読むのがむずかしい」ですが、あとはラテン語と考えると担がれてしまうのです。lectu mihi Mars は Leck' du mich im Arsch, つまり「俺の尻をなめろ」ということです。この Leck' du mich im Arsch はモーツアルトの口癖だったようで、手紙にもまたカノンにも(言葉の使い方が少し違いますが)たびたび出てきます。意味のない口癖で、わたしたちが、こんちくしょうとかくそ、／ といった言葉を日常使うのと同じことなのでしょう。

Bona nox, bist a rechta Ox ;
Bona notte, liebe Lotte ;
Bonne nuit, pfui, pfui,
Good night, good night,
Heute müß ma no weit,
Gute Nacht, gute Nacht,
Scheiss ins Bett, dass's kracht,
Gute Nacht,
Schlaf fei gesund
Und reck'n Arsch zum Mund. (K. 561)

お休み、おばかさん
お休みなさい、いとしのロッテさん
お休み、チェツ、チェツ
お休み、お休み
今日はもっとやらなくちゃ
お休み、お休み
ベッドに糞をしろ、音立てて
お休み
ぐっすりと



モーツァルト自筆楽譜
(ボローニャ, 国立音楽博物館)

そして尻に口をつけてなめるのだ。

このカノンは「お休みなさい」を上からラテン語、イタリア語、フランス語、英語、ドイツ語で言った後、奇妙な語呂合わせをしています。最後の4行がモーツァルト常用の文句で、先に述べた『ペーズレ書簡』の省略部分にも出てきます。こんなナンセンス・ソングを愛妻と朗らかに歌っていたのです。（「声楽のためのカノンと重唱」というタイトルでレコードがでております。）

ここでモーツァルト夫妻についてのエピソードを紹介しましょう。1790年、借金の山をかかえていた頃のことです。

「ケルントナー街にあるツアー・ジルベルネン・シュランゲ（銀蛇）に勤めていた従僕ダイナーは、モーツァルトを尊敬する一人だった。秋も深まってウィーンの空が冷え始まる頃彼は、もうそろそろ薪の用意はどうかをきくために、モーツァルトの家に立ち寄ったところが中に入ってみると、モーツァルト夫妻は床にキシリの音を立てて踊りまくっていたのである。彼は息をはずませて笑いながら言うのであった――

《ねえ君、ぼくたちは薪を買う金がなくて、暖をとるためにこうして踊っているのですよ》ダイナーは無言のままさがって、小一時間もたった後手押車にいっぱい薪を届けてきて、荷をおろすと一文の金もとらずに帰っていった。」（モーツァルトの逸話集より）（属啓成著『モーツァルト』《生涯篇》に所収）

私はスカトロロジーにこだわってきたようですが、モーツァルトの遊びの精神を度外視しては彼の全体像に近づけなくなってしまうのです。

モーツァルトの生涯に関して大きな関心を呼び起す事柄の一つは、彼の死をめぐる論議でしょう。

「1791年10月半ばすぎのことであつた。バーデンの湯治から帰ってきた妻コンスタンツェが、疲れている様子のモーツァルトを元気づけようと、気晴らしに連出してプラーター遊園地を散歩した。その時彼は《レクイエム》の作曲が進まないことを歎いて、目に涙を浮べていうのであつた。「きつと誰かに、毒でものまされたに違いない」（Gewiss—man hat mir Gift gegeben）と。（『音楽の友』1982年3月号）

この一言が火種になって毒殺説を生むようになったことは確かといわれていますが、「自然死説」または「病死説」と「毒殺説」は長い間、対立・抗争を続けてきました。ヨーロッパでは現在、《アマデウス》という毒殺劇がヒットしており、日本でも公演されることになったという事です。

最後にモーツァルトの作品について一言。

モーツァルトは父親宛ての手紙の中で「どんな種類、どんな様式の作曲でも、かなり巧く採用したり模倣したりすることができます」（1778年2月7日）と言っているように、創作活動は多種に亘っています。ここではオペラについてだけ簡単に触れますが、オペラはモーツァルトが全生涯に亘って携っていた分野です。その中で彼の本領が発揮されているのはオペラ・ブッフファ（喜歌劇）でしょう。その意味で登場人物の性格描写が巧みで、音楽が楽しい「フィガロ

の結婚 (Le Nozze di Figaro)」(K. 492) を最初に聞くのがよいと思います。軽快な序曲で始まるこのオペラには、例えばフィガロのアリア「もう飛ぶまいぞ、この蝶々」とか、小姓ケルビーノのカンツォーナ「恋とはどんなものかしら」などたいへん印象深い曲があります。この「フィガロの結婚」は 1786 年ウィーンで初演され、翌年プラハで大成功を収めたもので、友人宛の手紙の中で「何しろここじゃ、話題といえばフィガロのこと。フィガロのほかには何にもひかれず、歌われず、口笛を吹くのだってフィガロばかり。フィガロのほかのオペラは誰もいかず、いつまでたってもフィガロだけ」

(吉田秀和訳)と書いています。「もう飛ぶまいぞ」は 1791 年に「オーケストラのための 5 つのコントルダンス」(K. 609)の第 1 番に編曲されています。

モーツアルトを聴く喜びと楽しみは、ただひたすらモーツアルトの作品を聴くことから始まるのですから、できるだけいろいろなジャンルの音楽を聴くのがよいでしょう。

「モーツアルト頌」、モーツアルト賛美はいろいろですが、理論物理学者アルベルト・アインシュタインの言葉をもって終りとします。

「死とは……，モーツアルトを聴けなくなることです。」 (ドイツ語)

編 集 後 記

新入生の皆様，ご入学おめでとうございます。教養図書館ではこの閲覧ニュースを年，数回発行しています。毎回，教養部の先生方をお願いして，読書論，あるいは読書案内等を掲載しています。今回は英語の瀬谷先生にオックスフォード大学のボードリアン図書館をご紹介頂きました。又，独語の坂入先生には『モーツアルトの一側面』を頂きました。教養図書館所蔵のモーツアルト関連図書をご紹介致します。

吉田秀和全集 第 1 巻

モーツアルト・ベートーヴェン

白水社 1975

762. 108/Y 86/1

- 内容 1. モーツアルトー出現・成就・創造
モーツアルトーその生涯・その音楽
手紙を通じてみるモーツアルト
モーツアルトのコンチェルト
2. モーツアルトへの旅
モーツアルトの演奏をめぐって

モーツアルト頌

吉田秀和 高橋英郎共編

白水社 1966

762. 34/Mo 98

モーツアルトの手紙

吉田秀和編訳

講談社 1974

762. 34/Mo 98a

モーツアルトとの散歩

Henri Vangeon Gheon 著

(高橋英郎訳)

白水社 1964

762. 34/Mo 98b

モーツアルト その人間と作品

Alfred Einstein 著

(浅井真男訳)

白水社 1961

762. 34/Mo 98c

モーツアルトは誰だったのか

Wolfgang Hildesheimer 著

(丸山 匠訳)

白水社 1976

762. 34/Mo 98d

モーツアルト

Wolfgang Hildesheimer 著

(渡辺 健訳)

白水社 1979

762. 34/Mo 98c

モーツアルト wolfgang amadeus mozart 175b-91

海老沢 敏著

音楽の友社 1961

762. 808/D 25/V. 3

モーツアルト＝総特集

ユリイカ 第 10 巻第 15 号 1978

青土社



閲覧室風景

閲覧証の交付について

教養図書館を利用するには閲覧証が必要です。新入生の皆さんには、下記の日程で交付する予定ですから、当日、教養図書館カウンターまで取りに来て下さい。但し、医学部の新入生には、医学図書館で5月6日以降に交付します。

衛生学部 5月6日

薬学部 5月7日

獣医畜産学部 5月10日

水産学部 5月11日

なお、交付までの間は閲覧証の代りに学生証を使用して下さい。

閲覧ニュース 34号 1982.4月号

北里大学教養図書館

発行責任者 小野 健一

〒228 相模原市北里 1-15-1